

ハーフ・タイム

(下)

松田道雄の本



11

筑摩書房

ハーフ・タイム
(下)

松田道雄の本

11

筑摩書房

松田道雄の本 第11巻

第3回配本（全16巻）

1980年1月20日 初版第1刷発行

著 者 松 田 道 雄

発 行 者 布 川 角 左 衛 門

〒101-91 東京都千代田区神田小川町2-8

発 行 所 株式会社 筑 摩 書 房

TEL. (03) 291-7651（営業部）

TEL. (03) 294-6711（編集部）

振 替 東 京 6-4123

装 幀 栃折久美子

明和印刷・和田製本

© M. MATSUDA 1980

0395-74111-4604

目次

昭和五十年

一月	末ひろがり	名簿の整理	親子酒	優
	雅なお医者さん			
二月	故事新編	育児・祖父編	医学としての	
	水俣病	私立大学生		
三月	夜の電話	このごろの生活	湯治の旅	
四月	梅のさく家	子ども番組	病院の夕食	
	うつりかわり			
五月	健在なりや	人生問答	医者三代	

六月	名木健在なり	長かった十二日	43
七月	ビアガーデン新景	散歩	48
	人間の力を信じたい	新入大学生再論	
八月	佐々木さんのこと	かわったカンパ	59
	水浴旅行	戦争の記録	
九月	引き返すことのない地点	車内でさわぐ子ども	67
	夏の訪問客	受難	
十月	リハビリ	十代の人たち	77
	実と	外食	
		虚と	
十一月	加害者と被害者	付添いのおばさん	85
	院	瑣事	
十二月			93

三角関係 年賀状かき 左手の役 安
樂死のこと

昭和五十一年

一月.....105

年頭の思い 善行の人 「ぢいさんばあさん」

二月.....111

この一週間 忠告者への返事 医学雑誌のこと 女性解放

三月.....119

ある南画家 このごろの読書 女の子の自由
有馬山温泉記 オールハッピー

四月.....130

かもめ 過去の重み 解放途上の女
制服廃止の効用

五月.....139

重症風疹 幼稚園 ノンポリ派 保育

園

六月……………147

急成長 ジョセフィン・ベーカー ふた

つの自由 献本 医者の仲間

七月……………157

お友だち 医者と政治家 保母さんの手

紙 長時間保育

八月……………165

ラムネ菓子 男女不平等 雨の温泉宿

鈴鹿分校

九月……………173

むし歯 「東京宣言」 一年 速達の返

事 ポスター

十月……………183

山本覚馬伝 PTA 病院ゆき

十一月……………189

学園紛争の世代 秋夜 近代日本の興隆

読者からの手紙

十二月.....197

自立 年をとること 青春 いい本
ドウスさんの手紙

昭和五十二年

一月.....209

家庭科 寄贈本 東京ローズ

二月.....215

孫の「冬の下痢」 愛 市民・伊藤仁斎
後天性股関節脱臼

三月.....223

反ベストセラー 三角おむつ 「考える

会」 ことばの学習

四月.....231

おむつ談義 われら市民 市民と選挙
はしご酒

五月.....240

給食をのこす子 いま考えている 老来

多事 高度成長

六月……………248

出馬要請 クラス会 人権新説 写真

ガン末期

七月……………258

百姓分量記 敵は本能寺 早期教育

荷風の日記

八月……………266

ミルクぎらい 未来物語 るす番 医

者の卵 ナロードニキ

九月……………276

夏かぜ 速達便 本の虫 ちびくろ

保育園

十月……………284

京の秋 寿町保健婦日記 スターリニズ

ム 姉と妹

十一月……………292

内申制 杜甫詩注 遠い島 主婦

お見舞

十二月……………302

死と生 留守番のできない子 自閉症

世話しない

「ハーフ・タイム」下によせて……………311

編集 藤好美知
カット 桑野博利

ハーフ・タイム
(下)

昭和五十年



一月

末ひろがり

正月といっても私の生活は、たいしてかわらない。あそびにくる孫たちの服装が新品になっているくらいのものだ。

家のなかは正月だからと特別の模様がえはしないことにしている。しているという意識してやっているようだが、実はそうせざるをえないのだ。

子どもたちが結婚するまえは、男三人女二人の労働力があつたから、年末に手分けして、すす払いをやったが、二人になってしまつてからは、それができなくなった。

すこし大がかりな掃除をしようとすると、各部屋に積みあげてある本を移動させなければならぬ。二人のどちらかがぎっくり腰にでもなつたら、のこつた方がたまらないので、現状維持にしておこうということになる。

家のなかは正月でもかわらないが、家のそとは一変する。西部劇にでてくるゴースタウンに似た風景だ。

街路に人も車もない。どの家のまえにも駐車していたマイカーは、家族をのせて新春の旅にでし

まったのだろう。

以前は正月といえば、道路で羽根つきをやっている女の子の姿がみられたが、このごろは子どもの姿がみえない。

人も車も通らず、何の音もしないゴーストタウンは、以前は元日だけの風景だったが、レジャーがやかましくいわれるようになってから三日間つづく。

まわりがせっかく静かになったのだから、音のするテレビをとめて、おもてに近い部屋で、こたつでゆっくり新聞をよむ。各社がどんな正月企画をしたかを、多少意地わるく比較する。

昭和も五十年というので、いろんな未来展望がでている。お正月で不吉なことは口にしない習慣から、おめでたい話がおおい。

人さまのまえにたって抱負を語るとなるとどうしても末ひろがりの口上になる。日常がおもしろくない人間がおおいのだから、将来はもっとよくなりますよ、力を落としなさんという話のほうがかかるにきまっている。

だが、私は今年から、末ひろがりの話には警戒心をつよめたいと思っている。それは、末ひろがりの話には、ひとつの落とし穴があることに気づいたからである。

末ひろがりの論者には、自分の責任を将来のどこかにぼやかしてしまいう人がおおい。有限責任でかんがえると、そう末ひろがりの話はできないはずだ。

有限責任にしたほうがいいと思いだしたのは、私のところに送られてくる保育園の父母の会とか、主婦グループとかでだしている機関誌が、責任者だけの労力におんぶしていて、責任者のくたびれに

応じてあっぱあっぱしているのが、おおくったからだ。

市民運動といったものは、はじめから年限をきって、初心を完全に使いきるようにしたほうが、のたれ死にの挫折感なしにすませると思う。

(50・1・7)

名簿の整理

一月の前半は、毎年、夫婦ともにいそがしい。千三、四百通いただく年賀状の整理に追われるのである。

もらった年賀状をアイウエオ順にそろえて、おなじくアイウエオ順になっている名簿と照らし合わせて、こちらがだしていないのに、むこうからくださった方に、なるべく早く答札をだす。

この追加分が、いつも百五十から二百ぐらいある。

今年はごめんこうむって来年からだすことにすればいいのだが、「あかんぼの時みていただいた子どもが中学にはいりました」とか、「結核の時代お世話になったものですが、今は元気になっています」とか、かきそえてあると、どうしてもだまっていられない。

毎年でなく、なにかの機会で思いだして年賀状をくださるのは、むこうの好意のしるしなのだから、おたがいに好意をもつことで住みよくしようといっている手前、黙殺というわけにはいかぬ。

つめてやれば一日で百五十通かくことはかけるが、問題は百五十通をみつけたすことである。